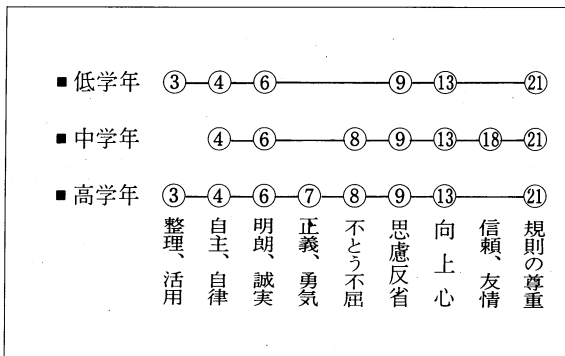


図1 学級の目標と個々の生徒の指導上の目標

A. 学級の目標について	B.			
	児童名	指導上の課題	主な理由	重点価値
1. 学級の状況、特徴				
2. 学級の目標				
3. 指導上配慮している事項				

■生活指導の課題と殆んど重なるが、徳実践力という視点をおさえる。
 ■左の課題を考えた理由・生活態度(行動)・生活環境上など。
 ■道徳指導上どんな価値を軸にして指導しようか。

図2 重点価値の集約



本校では図1に示したように、一人一人の児童について指導上の課題を把握し、その集約に立って指導目標を的確にとらえる努力をしている。

この資料は、道徳教育の全体計画、年間指導計画を検討していく上に生かしている。さらに、この資料は本校の現状を示すことにもなり、指導態勢を強化する上で重要な資料ともなっている。

図1の重点価値を集約し、整理してみると図2のような状況となる。全年齢年共通しているところ、低中高学年別により異なるところと児童の実態に対応した教師の願いが読みとれる。

さらに、この資料をもとに道徳教育の重点目標、重点指導事項等に関連さ

せて、学級の指導目標をより確かなものにしていく。

(二) 道徳の時間の充実

(1) 指導過程(基本型)

先進校の授業を参観させていただいて感心することは、教師が自信にみちた態度で授業をすすめていることである。この態度はおそらく授業に対する見通しを持ち、児童と共に考えていることとする教師の姿勢を持っているからだと思う。

本校としても、授業を担当する誰もが道徳の授業を苦にせず取り組めるような実践的な研究にしたいと考えた。

また、協同推進校としても、各校が共通の理解に立つて道徳の時間の指導過程を組むことの必要から、図3に示した(授業者の工夫が加味されることを含めて)授業の基本型を設定した。

(2) 展開前段の発問

展開前段は、主資料を用いてねらいとする価値の追求把握をする過程である。その目的を果たすために、どんな発問をどんな順序で行えばよいのかが問題になる。この問題の解決が授業に対する自信を深めることになると考えた。

児童が道徳的価値を自分のものとして受けとめるには、問題場面に直面しそこで葛藤しながら自分なりに一つの価値を指向する。それが結果として良否いずれのものであったかは、その後の周囲からの多様な考え方に出会うことで強化される。また、どうすること

図3 授業の実践例：3年「なかよしだから」(18信類・友情)

過程	目的(形成過程)	(発問)
展開前段	ねらいとする価値の追求把握	問題場面に意識を焦点化する発問
	問題場面	○ぼくのたのみを強くことわった実君をどう思うか。
	↓ 葛藤の場	問題場面で葛藤させる発問(B' 類別して比較する)
	↓ 価値志向	○実君に断われたときのぼくのはどんなだったか。
	↓ 感 受	ねらいとする価値について深める発問 (中心発問)
		○ぼくがだんだん分かってきたのはどんなことか。
		○このあと、ぼくは実君をどう思うようになったか。

が人間として望ましいあり方であったのかを感受するものも、その後の周囲からの情報を得てからが多いのである。

児童が日常生活において、このような一連の過程をたどって道徳的価値を主体的に受けとめていくとするならば道徳の時間においても、資料を通して追体験しながら、そのような過程をたどることがより自然であり、効果的であると考える、展開前段における発問の